

## ■「版築工法」ってなに？

中国で発明され日本に伝わった、土や砂をサンドイッチ状に薄く突き固める技術のことです。土台とする場所に土砂を同じ厚さで敷き、それを半分ほどの厚さになるまで棒などで突き固めることを繰り返し、徐々に高くします。

古代のお寺のお堂や塔などの中に、周りの地面から一段高い所に作られているものがありますが、その土台の多くはこの工法で作られたものです。



総柱建物の版築工法



## 瓦 どう 廃棄土坑

調査区の東端、道路の真ん中あたりに約4m四方、深さ約1.6mの土坑が発見されました。その中からは、8~10世紀ごろに作られた須恵器(※5)が見つかっています。

また、大量の瓦も捨てられており、その多くは8世紀前半のものとなりました。土坑の下の方からは建物に使われたと考えられる粘土やスサ(※6)などの建材も見つかりました。

これらは、西側から流し込まれているため、総柱建物に使われていた可能性が高いですが、現状ではよく分かりません。しかし、当時の建物の姿を知るための貴重な資料となります。

## ■今後の課題

町北遺跡の駅路や建物が使われていた飛鳥・奈良時代、今の安中市にあたる地域は碓氷郡(飛鳥時代は碓氷評)とよばれ、郡家・評家という古代の役所が置かれました。

また、町北遺跡から北に約300mにある植松・地尻遺跡の発掘調査では「評(ひょう、またはこおり)」と刻まれた須恵器が見つかっており、

飛鳥時代の役所の推定地とされてきました。

今回の町北遺跡の発見は、植松・地尻遺跡から本遺跡までが古代役所の範囲だったことを示し、従来の説を裏付けるものです。今後、東山道がどこに移されたかも含め、古代碓氷郡中心地の解明を進めていきます。



### 発掘調査担当者

みりよく創出部文化財課  
埋蔵文化財係 鳥居主事

すでに発掘調査は終了していますが、主要な遺構は将来に備えて、土のうや盛土などの保護措置をとったうえで埋め戻しを行いました。

☎困文化財課埋蔵文化財係(☎内線3421)

※5 須恵器…古墳時代に朝鮮半島から伝わった、青灰色をした固い土器。野焼きではなく窯で焼かれた

※6 スサ…壁を塗る際、ひび割れ防止や補強のために混ぜる植物繊維のこと。稲わらや麻などがある